

「内の情報」/「外の情報」

文末要素の分析

村山 康雄*

キーワード: 「内の情報」/「外の情報」, 「内の助動詞」/「外の助動詞」, 終助詞, 「なら」, 「から」

要 旨

文末要素は話し手の命題に対する態度を表わす。Kamio (1979), 神尾 (1985) は情報に対する話し手の関わりという観点から、また Uyeno (1971), 上野 (1972) は命題に対して誰が最終判断を下すのかという観点からそれぞれ分析している。

ここでは命題が何に基づいているのか、話し手の主観に基づいた判断か、それとも外部の根拠に基づいた判断なのか、言い換えれば、命題が話し手の「内の情報」なのか、「外の情報」なのかという観点から文末に現われる助動詞を分析する。前者であることを示すもの、後者であることを示すものがあり、それぞれ意味的特徴、また終助詞との共起という統語的特徴を持っている。また、この意味的な特徴が「なら」と「から」を区別する尺度となり、「なら」の前件は話し手以外からの「外の情報」、「から」の前件は話し手自身の「内の情報」であることを示す証拠となる。

1. これまでの文末要素の分析

1-1. Kamio (1979), 神尾 (1985)¹

神尾は文末要素を話し手の情報に対する関わりという観点からとらえ、「直接形」と「間接形」に分けた。前者は話し手が直接目撃したり、事実であるとみなしていたり、さらには自分に直接関係がある情報を表わす時用いられ、確信を伴う断定を表わす。他方、後者は話し手がその内容に確信を持っていない時用いられ、不確定さを伴う伝聞や、推量などを表わす。a が「直接形」、b が「間接形」の文末要素である。神尾は「情報のなわ張り」という概念を提示し、ある情報がどちらの形で表わされるのかを決める条件を、さらにくわしく議論している。

(1) a. 太郎は昨日花子に公園で会った- ϕ^2 / よ / んだ(よ)

* MURAYAMA Yasuo: 文教大学情報学部専任講師。

¹ 以後これら二つの論文を合せて神尾と記す。

² 神尾はこの記号を文末が述語動詞のみで終る形であることを示すのに用いている。

- b. 太郎は昨日花子に公園で会った- って / ようだ(な) / そうだ(ね)

1-2 Uyeno (1971), 上野 (1972)³

上野は命題の最終判断を誰が下すのかという観点から、終助詞を二つのグループに分類した。

- (2) 明日はきっと雨になる- わ / ぞ / ぜ / さ / よ

と言った場合、話し手は聞き手に自分の判断を示しているだけで、相手の同意、確認を求めているわけではない。つまり自分が最終判断を下している。他方、次のように言った場合には、話し手は相手に「はい / いいえ」の返答を期待しているか否かは別として、相手の同意、確認を求めている⁴。つまり、相手が最終判断を下すことになる。

- (3) 今日は寒いです- ね / な / ねえ / なあ

2. 情報源から見た文末要素の分析

では、ここでは別の観点から文末要素を見てみよう。

- (4) a. 花子はピアノが上手だ- ϕ
b. 花子はピアノが上手だ- そうだ

a と b の文では、「花子はピアノが上手だ」という命題に対する話し手の態度が大きく異なる。前者では、話し手は「花子はピアノが上手である」と断定し、自らの意見として述べている。一方後者の文は話し手が自らそのように思っているというのではなく、そのようなことをどこかで聞いたことがあるということを意味している。

a の文では話し手は自らの発想として、確信に基づいて「花子はピアノが上手だ」と判断しているのだが、そのことを示すのが文末の ϕ (ゼロ) である。他方 b においては話し手は外部の判断材料である伝聞によってそう判断しているのだが、それを示すのが「そうだ」という助動詞である。

³ 以後これら二つの論文を合せて上野と記す。

⁴ 上野は「ね」、「な」は相手に「はい / いいえ」の返答を期待し、「ねえ」、「なあ」はそうではないようだと述べている。

⁵ この記号は文末がこの文あるいは (1) a のように「...だ」あるいは「...する」のような述語動詞のみで、およびそれに「です」、「ます」が付いて終る形であることを示す。神尾の「直接形」と同じである。注2を参照。

(4) a の「上手だ」の「だ」を、b の伝聞の「(だ)そうだ」などと対応させて断定を意味する助動詞と考えても良いのだが、そうすると (1) a のような英語でいう一般動詞で終る文には「だ」が現われないので、話し手の確定的な判断を表わす要素が無くなってしまふ。そこでここでは神尾に従い、そのような意味を表わす ϕ 要素が存在し、そしてこの要素を助動詞の一種であると考えておく。

つまり、文(=情報)には a のように命題が話し手自らの主観に基づいた判断であるものと、b のように外部の根拠に基づいた判断であるものがある。前者を話し手の内部から出た話し手自身の情報という意味で「内の情報」、後者を外部の根拠に基づく話し手以外の情報という意味で「外の情報」と呼ぶことにする。この言葉は文の命題のみ、さらには判断の根拠を示す ϕ 、あるいは「そうだ」のような助動詞をも含む文全体を指す場合もある。そしてどちらの情報であるかを示すこれらの文末に現われる助動詞を、それぞれ「内の助動詞」、「外の助動詞」と名付ける。それぞれの助動詞は特有の意味的、統語的な特徴を持っている。

2-1. 助動詞の分類

判断の根拠を示す助動詞を分類し、それぞれの助動詞の意味を簡単に見る⁶。

- (5) a. 内の助動詞 ϕ , だろう, (し)そうだ
b. 外の助動詞 ようだ, らしい, (だ)そうだ

2-1-1. 「内の助動詞」

これらの助動詞は情報が話し手自身の主観的な判断に基づいたものであることを示す。

- (6) 明日は雨になる- ϕ / だろう / (り)そうだ

もちろん、このような文は、例えば空模様を見てのように、外部の刺激がきっかけで、それに対する反応として発せられるものであるが、この情報は外部の根拠に基づく判断を表わしているのではない。

2-1-1-1. ϕ

話し手の確信を表わし、命題を断定する意味を持つ。神尾の言う「直接形」の形である。

2-1-1-2. だろう

話し手の単なる推量や想像を表わす。

2-1-1-3. (し)そうだ

現在の様子からの未来に対する推量を表わすが、未来の予測が中心ではなく、いまそのようになる様相を呈していることを表わすのが主たる意味である。「外の助動詞」のように思われるが、そうではなく話し手自身の内部からの判断を表わす。森田(1980: 223)は「現状を拠りどころにしての主観的判断である」と言っている。また、Alfonso(1966: 1067-68)は“-SOO involves a

⁶ この論文の目的は、「内の情報」/「外の情報」および「内の助動詞」/「外の助動詞」の違いを調べることで、それぞれの助動詞の意味および使用上の違いについては細かく触れない。「だろう」/「(し)そうだ」の違いについては、森田(1980: 222-223)、「そうだ」/「ようだ」については、Alfonso(1966: 1067)、森田(1980: 221-222)、「ようだ」/「らしい」については、森田(1980: 507-509)、生田目(1979)、柏岡(1980)などを参照。

PERSONAL REFERENCE absent in YOO and -RASHI.”と述べ、またこの個人的印象は「...(な)気がする」という言葉によって強められるとも言っている。

2-1-2. 「外の助動詞」

これらの助動詞は情報が外観であるとか伝聞であるとか、外部の根拠に基づいた判断によって得られたものであることを示す。

(7) 太郎は今日のパーティーに出席する- ようだ / らしい / そうだ

2-1-2-1. ようだ

外部の根拠が多少不確かな話し手自身の直観的印象を表わす。生田目(1979)は「らしい」同様根拠のある推量を表わすのに用いるが、この表現は客観の情勢をそのまま受け入れて自分の観察によるとそう見える」という意味であると定義している。「ようだ」のくだけた表現として、「みただ」がある。

2-1-2-2. らしい

確かな外部の根拠のある推量、他人の判断を借りた推量を表わす。

2-1-2-3. そうだ

他人から伝え聞いたこととして述べる伝聞を表わす。他人の判断を伝える。

2-2. 「内の助動詞」と「外の助動詞」の意味的特徴

前節で助動詞を二つのグループに分類したが、それぞれのグループの助動詞は共通した意味的な特徴を持っており、それらは「内の助動詞」、「外の助動詞」を区別する尺度としての働きをする。

2-2-1. 自分自身のことを言及するのに用いられるか

「内の助動詞」は情報が話し手自身の内部から出た主観的な判断に基づくこと、つまり自らの発想であることを示すので、話し手自身の予定、意志、意図や話し手に属する事を表わすことができる。一方、「外の助動詞」は情報が外部の根拠に基づくことを示すので、これらのことを表わすのに用いられない。例えば、自らの意志により行う行動を外部の根拠によって推測するのはおかしい。

(8) A: 今日中にあなたの今やっている仕事終わりますか

B: ええ、今日中に終- ります φ / るでしょう / りそうです

終る- *ようです / *らしいです / *そうです

(9) こんなことをお母さんに言ったら、叱られる- φ / だろう / (れ) そうだ

叱られる- *ようだ / *らしい / *そうだ

なお、(10)に見られるように「だろう」は話し手自身の予定⁷意志を表わすのに用いることはできない⁸。また「(し)そうだ」もこれらを表わせにくいようである⁸。もちろん、「外の助動詞」は用いることができない。

- (10) ぼく、来週京都の学会に行く- ϕ / *だろう / *(き)そうだ
行く- *ようだ / *らしい / *そうだ

次の文は話し手に関することを述べているが、話し手の意志を述べているのではなく、外部の根拠、つまり他人の話に基づく判断を表わしているので、「外の助動詞」が用いられる。話し手本人の発想である(9)と比較せよ。

- (11) 友達の話では、明日ぼく先生に呼ばれて叱られる- ようだ / らしい / そうだ
叱られる- ϕ / *だろう / *(れ)そうだ

2-2-2. 命題に対して疑問を持つことができるか

話し手が、自分で発した文の命題を自ら疑うことができるか否かが、「内の助動詞」であるか「外の助動詞」であるかを区別する。

- (12) a. 今度の日曜日太郎が家に遊びに来る- ϕ / だろう / (来)そうだ
*でも、本当に来るのかな
b. 今度の日曜日太郎が家に遊びに来る- らしい / *そうだ
*でも、本当に来るのかな

「内の助動詞」は話し手自身の内からの主観的な判断を示すのであるから、その自らの発想に対して自ら疑問を持つことはできない。他方、「外の助動詞」は外部の根拠に基づいた情報であることを示すので、その「外の情報」、例えば他人の判断を疑うことはできる。ただし、「ようだ」は先に述べたように、外の根拠に基づいてはいるが話し手の直感的な印象を示すので、それを疑うことはできないようである。

2-2-3. 「きっと」/「たしかに」との共起

共に、ある情報に対して話し手がその情報は間違いないと感じた時に用いられるが、それぞれが用いられる時には、話し手の態度が異なる。「きっと」は「...(に)ちがいない」という断定

⁷ Alfonso (1966: 254-255) などを参照。

⁸ なお、次のように話し手の意志を表わすのではなく、自然とそのような状態となることを表わす動詞の場合は可能である。

こんなに寒いと凍え死に- そうだ

に近い推量から「...だろう」の推量まで幅広く話し手の主観に基づく推量を表わす⁹。すなわち、話し手自身の内側からその情報は間違いない(だろう)という主観的な判断である。他方「たしかに」は、外部にその情報が間違いないという拠り所がある場合の判断である。Alfonso (1966: 302) は “TASHIKA NI is used when the certainty is grounded on some facts actually present or on some sensible experience; KITTO is used when expressing personal conviction,...” と述べている。つまり、「きっと」は話し手の内からの、「たしかに」は外部の根拠に基づく判断を表わすのに用いられると言えよう¹⁰。

- (13) A: あの人誰かしら
 B: {きっと / *たしかに} 田中さんよ
 (14) A: あの人田中さんですね
 B: ええ, {たしかに / *きっと} 田中さんです

そのため「きっと」は話し手の主観的な判断を表わす「内の助動詞」としか共起できない。

- (15) 太郎は来年の春にはきっと卒業できる- φ / だろう / *(き) そうだ
 きっと卒業できる- *ようだ / *らしい / *そうだ

「(し) そうだ」は推量ではなく、現在の様相を表わすのが中心の意味なので、推量の「きっと」とは共起しない。他方、「外の助動詞」は「たしかに」と共起できる。

- (16) たしかにあの人悪い人ではない- ようだ / らしい / そうだ

2-2-4. 「内の情報」/「外の情報」であることを示す語句との共起

話し手が自分の主観としてそのように考え、意見を持っていることを意味する動詞「...(と) 思う」は、現在の様相を表わす「(し) そうだ」を除いて「内の助動詞」と共起する。しかし「外の助動詞」とは共起しない。

- (17) (ぼくは)花子が今年は大学に {受かる- φ / だろう / *(り) そうだ} と思う
 {受かる- *ようだ / *らしい / *そうだ} と思う

「想像する」、「見る」、「察する」なども「思う」同様、「と」に続けて用いられ、話し手の主観的な意見を表わし、「内の助動詞」だけと共起する。

逆に、外部の根拠に基づいた情報であることを示す語句とは「外の助動詞」は共起できるが、

⁹ ここで議論しているのは、推量の「きっと」である。「きっと」にはこの他に話し手の決意を表わしたり、相手に必ずこうして欲しいと要望する意味もある。

[要望] A: 明日きっと来てね

[決意] B: ええ, きっと伺います

¹⁰ 「きっと」の他に「たぶん」、「おそらく」も情報が話し手の主観的な判断であることを示す。

「内の助動詞」はできない。

- (18) 聞くところでは、太郎はもうすぐ退院できる- ようだ / らしい / そうだ
退院できる- * ϕ / *だろう / *(き) そうだ

「内の助動詞」の後ろに、人から伝え聞いたことであることを示す「...ということだ」や「...という話だ」が続くと文法的になる。

2-3. 統語的特徴—終助詞との共起

「内の助動詞」、「外の助動詞」の違いはこれらの助動詞と終助詞との接続にも見られる。終助詞の中には「内の助動詞」としか接続しないものがある。その逆¹¹、つまり「外の助動詞」のみと結びつくものはないが、両方の助動詞に接続するものはある。

2-3-1. 「内の助動詞」のみに接続するもの

以下の終助詞は「内の助動詞」のみと共起し、「外の助動詞」とはしない。

2-3-1-1. 疑問を表わすもの

疑問を発するということは、話し手自身の内部からの判断、自らの発想が正しいか否かを尋ねるのが普通で、わざわざ外部の根拠に基づいたそのような情報があるかどうか尋ねることは不自然である¹¹。疑問を表わす終助詞「か」との共起を見てみよう。

- (19) 花子は来年の春、太郎と結婚 [します ϕ - か / するでしょう- か / しそうです- か]
結婚する {?ようです- か / *らしいです- か / *そうです- か}

疑問の「の」も同様「内の助動詞」に接続するが、「だろう」とは共起しない。なお、疑問はこれらの終助詞が無くても、尻上がりのイントネーションでも表わせ、この場合も「内の助動詞」のみが可能である。

2-3-1-2. 否定を表わすもの

終助詞ではないが否定を表わすものに、助動詞および形容詞の「ない」がある。例えば人から尋ねられた時、自らの発想ではそのような判断はしていないということは自然であるが、疑問の場合同様、わざわざ外部の根拠に基づいたそのような情報は無いというのは不自然であるから、「ない」は「外の助動詞」とは共起しない。

¹¹ 相手がうわさなど「外の情報」があることを示したとき、それに対して「外の助動詞」を用いて疑問を発することもできるが、不自然な感じがする。

A: 彼、最近あまり会合に顔を見せないって話だよ

B: 彼、体の具合でも悪い {?*ような- の・んですか / *らしい- の・んですか / *そうな- の・んですか}

- (20) 太郎は今年卒業【でき ぬ- ない / *できるだろうに- ない / できそうに- ない】
卒業できる【*ようで(・に)- ない / *らしく- ない / *そうで(・に)- ない】

「だろう」は否定できないようである。なお、「らしい」は推量の意味ではなく、名詞に続き「...に似ている」という比況の意味で用いられる時には「ない」と共起する。

- (21) 太郎は遊んでばかりいて学生らしく- ない

もちろん、そのようでない外部の根拠があるという場合、この意味での否定は可能である。

- (22) 太郎は今年卒業できない- ようだ / らしい / そうだ

2-3-1-3. 当然、当前を表わすもの

「さ」、「とも」は「もちろん」、「当然」という言葉と共によく用いられ、その情報は自明である、わかりきっているという意味を表わす。だから自分自身の発想ではない「外の情報」のような話し手にとって不確実な情報には用いることができない。「さ」は話し手の確信、推量を主張し、「とも」は確信の気持を強め、また人から尋ねられた時の再確認にも用いられる。これら二つが結びつき「ともさ」の形でさらに意味を強めることがある。

- (23) A: 今年もまた台風がたくさん来るの
B: もちろん来る【ぬ- さ / だろう- さ / *(来)そう- さ】
【ぬ- とも / *だろう- とも / ?*(来)そうだ- とも】
来る【*よう- さ / *らしい- さ / *そう- さ】
【*ようだ- とも / *らしい- とも / *そうだ- とも】

2-3-1-4. 伝 達

「って」は「...ということだ」という意味で人の話を紹介するので、伝聞の「(だ)そうだ」に近く、「外の助動詞」と似た役割を持っている¹²。そのためこれらが重なると、余剰的な感じがして不自然なようである。

- (24) a. (太郎が言うには)来週英語の試験がある【ぬ- って / だろう- って / (り)そうだ- って】
b. (聞くとところによると,)来週英語の試験がある【?*ようだ- って / ?*らしい- って / *そうだ- って】

¹² 伝聞と伝達との間には次のような統語的な違いが見られる。伝聞の「そうだ」は2-3-1-1および2-3-1-2で見たように疑問文、否定文にはならない。一方伝達の「って」は疑問文になる。また「ということだ」は否定文にもなる。

明日(は)雨が降るって- / (尻上がりのイントネーションで)

明日は雨が降るということですか

明日は雨が降るということでは- ない

2-3-2. 「内の助動詞」/「外の助動詞」両方に接続するもの

話し手の発言を強調、主張したり、あるいは聞き手に発言に対する返答、確認を求めるものが両方の助動詞に接続するようである。

2-3-2-1. 強調の「よ」、「ぜ」

共に自分の発言を強調したり、相手に念を押す働きをする。

- (25) 花子はもう少しで逆上りができる { ϕ -よ・ぜ / だろう-よ・ぜ / (き) そうだ-よ・ぜ}
 できる {ようだ-よ・ぜ / らしい-よ・ぜ / そうだ-よ・ぜ}

「内の助動詞」のみと共起する「さ」、「とも」も強調の意味があるが、それらは2-3-1-3で見たように話し手の主観に基づく判断、とくに確信を強調する。それに対して「よ」、「ぜ」は話し手の単なる想像や「外の情報」をも強める働きをする。

また「よ」は「さ」とよく似た状況で用いられるが「よ」には「さ」に見られる当然、自明であるといった意味が無いようである。Uyeno (1971: 84) はこれらの語の違いに触れて、“in the case of the particle yo the speaker's insistence is implied, but yo does not imply that what is stated is a matter of course.”と述べている。

次の例を見てみよう。

- (26) A: ねえ、兄さん、今年の夏も東京の従兄たちが遊びに来ると思う

B: {うん、とうぜん来る-さ}
 {いや、来ない-よ/*さ}

なぜ質問に対する返答が否定の場合には「さ」が用いられないのだろうか。肯定で答えるというのは、話し手 B がその情報をすでに知っているということである。そこでただ知っているというだけではなく、さらにその情報は話し手にとっては当たり前であると強調し、同時に同じ情報を持っている相手にそれを確認してもおかしくはない。ところが否定するということは、自分はそのような情報は持っていない、だからその情報は間違っていると言っているのであるから、その情報は話し手にとっては当たり前のことではない。だから、自分とは別の情報を持っている相手に対して、確認を込めて自分の情報は当たり前であることを主張する「さ」を用いることはできない。

Jorden (1987: 33) は、「よ」は “indicates that the speaker assumes s/he is providing the addressee with new information or a new suggestion; ...” と述べている。つまり、(26) B の否定の返答に見られるように、話し手が相手とは別の、すなわち相手の知らない情報を主張するのに「よ」が用いられるのであるから、「よ」は「新情報」を相手に与えていることになる。

2-3-2-2. 同意, 確認を求める「な(あ)」, 「ね(え)」

これらの終助詞は自分の発言に対して相手に同意, 確認を求めるのに用いられ, 両方の助動詞と接続する¹³.

- (27) (おい,) 今夜にも台風が上陸する { ϕ - な・ね / だろう- な・ね / (し) そうだ- な・ね}
上陸する {ようだ- な・ね / らしい- な・ね / そうだ- な・ね}

2-3-2-3. 主張, 断定を表わす「わ」「ぞ」「の」「のだ」

「わ」「ぞ」は主張を, 「の」「のだ」は断定を表わし, 「内の助動詞」「外の助動詞」両方に接続する。しかし推量の「だろう」とは共起しない¹⁴.

- (28) この時計電池がなくて, もうすぐ止まる { ϕ - わ・ぞ・の・のだ}
*{だろう- わ・ぞ・の・のだ}
{(り) そうだ- わ・ぞ・の・のだ}
- (29) この週末先生が家庭訪問にみえる {ようだ- わ・ぞ, ような- の, ような- のだ}
{らしい- わ・ぞ・の・のだ}
{そうだ- わ・ぞ, そうな- の, そうな- のだ}

3. 「なら」と「から」の違い

3-1. Akatsuka (1985) の分析

Akatsuka は「なら」と「から」の違いを, 話し手の情報に対する認識の観点からとらえている。「なら」は元来条件を表わす語であるから, 「たら」「ば」同様, 「非現実相」に属する情報, すなわち話し手が真であるか否か不明であるとみなしている不確実な情報や, 偽であるとみなしている反事実を表わすはずである。一方すでに起った出来事や話し手が真であるとみなしている情報は「現実相」に属する。

ところが「なら」は (30) に見られるように, 話し手が新しく獲得し, かつ真であるとみなしている情報をも表わすことがあり, またその証拠としてそのような場合, B は仮定を表わす「もし」を用いることができないとしている。

- (30) A: ぼくこの冬スキーに行くよ
B: *もし, きみが行くなら, ぼくも行くよ

B は A の発言を聞くまで「A がスキーに行く」という情報を知らなかったのである。Aka-

¹³ 「ね」と「ねえ」および「な」と「なあ」の違いについては注4を参照。

¹⁴ これについては上野, 村山(1991 予定)などを参照。

tsuka は、このような情報を表わすのに「新獲得情報」‘newly-learned information’ という概念をあみだし、この情報は真であるとみなされているにもかかわらず「非現実相に属するとした¹⁵。そしてこの情報は時間の経過とともに「現実相」に移行し、それに属する情報を表わす「から」が用いられると述べている。B がそのあと妻に電話をしてそのことを伝える時には、(31)に見られるように「から」を用いる。これはすでにその時には話し手はその情報を確信しており、それは自分の知識(の一部)となっているからであるとしている。

(31) A さんがスキーに行く {から / *なら}, ぼくも行くよ

3-2. 「内の情報」/「外の情報」による分析

ここでは Akatsuka とは別の観点から「なら」と「から」の違いを説明する。前章で「内の助動詞」と「外の助動詞」を分ける際、いくつかの意味的な尺度があることを見た。その尺度は「なら」、「から」の区別をするのにも用いることができる。

3-2-1. 自分自身のことを言及するのに用いられるか

Kuno (1973: 168-169) などが指摘している通り、「なら」を用いた場合、前件の想定主体は話し手ではなく、相手から得た情報などの外のものである。つまりその情報は「外の情報」である。そのため、前件には話し手自身の予定、意志、感情などは表わすことはできない。自分の予定、意志を他人から知らされ初めて知り、それを不確実な、疑いのある状態を表わす「なら」を用いて述べるのはおかしい。

一方、「から」は Akatsuka が述べているように、話し手の確信を表わすので想定主体、すなわち情報の発進源は話し手本人である。自分が持っている知識から発するのである。つまり「から」の前件は「内の情報」である。だから、話し手自身の予定、意志などを表わすことができる。これは議論が進むにつれさらに明白となる。

- (32) a. *きみが言うように, ぼくがその本を買うつもりなら, 太郎も買うと思いますか
 b. きみが言うように, 花子がその本を買うつもりなら, 太郎も買うと思いますか
 (33) ぼくはその本を買うつもりだから, きみも買ったほうがいいと思うよ

3-2-2. 命題に対して疑問を持つことができるか

「内の助動詞」を用いた場合には、話し手はその命題を自ら疑うことはできないことを前章で見たが、同様に「から」の前件は「内の情報」なので、それに対して話し手自ら疑問を持つことはできない。

¹⁵ この概念の存在の正当性を日本語の補文化詞「と」の分析などによって証明している。

(34) 太郎がもう帰るから、ぼくもそろそろ帰ります *でも本当に太郎は帰るのかな

他方、「から」の前件は「外の情報」なので、話し手はそれを疑うことができる。

(35) A: ぼくそろそろ帰ります

B: きみが帰るなら、ぼくも帰るけど、きみ本当に帰るの

(35) のような場合、Akatsuka は話し手は「なら」の前件を真であるとみなしていると主張しているが、B が A の発言を疑うことができることから分かるように、話し手は前件を聞き手として完全に同意しないまま提出しているだけである。B の発言は (36) のような意味であると考えることができる¹⁶。

(36) きみが帰ると言うから、それを仮に事実であるとする、その条件の元では、...

前件の内容が真であるか否かに関しては態度を保留しており、あくまで仮定の意味が残っている。次の例を考えてみよう。

(37) A: 明日、学校休みだよ

B: うん、知っているよ 学校がない {から/*なら}、どこかに遊びに行こうか
えっ、知らなかった 学校がない {なら/*から}、...

「から」が用いられるのは話し手が情報を知っている、言い換えればその情報を確信している、つまり真であるとみなしている場合である¹⁷。他方、「なら」は情報を知らない場合用いられる。つまり、話し手はその情報を確信しておらず、真であるとはみなしていないのである。B は (38) のように言うこともできるだろう。

(38) えっ、知らなかった それ本当ですか もし、その情報が本当なら、...

3-2-3. 「きっと」/「たしかに」との共起

「きっと」は「内の助動詞」と共に、「たしかに」は「外の助動詞」と共に現われた。同様に、「きっと」は「から」の前件に、「たしかに」は「なら」の前件に現われる。すなわち、「から」の前件は「内の情報」であり、「なら」の前件は「外の情報」であるということになる。

(39) この問題は今度の試験にきっと出るから、よくやっておいた方がいいよ

(40) A: 花子は今度生徒会長に立候補するよ

¹⁶ Alfonso (1966: 687) などを参照。

¹⁷ ここで、「から」の前件は必ず真でなければならないと言っているのではない。「から」は話し手の想像を表わす「だろう」や「外の助動詞」の「ようだ」「らしい」のような不確実な情報を表わす助動詞にも続くことができる。少なくとも、前件が真である場合には「なら」ではなく「から」が用いられるということである。

B: {たしかに / *きっと} 立候補するなら, みんなで応援してやろうよ

おわりに

情報には話し手の主観に基づくものと、外部の根拠に基づくものがあり、情報がそのどちらであるかを示す助動詞があることを見た。それぞれ、「内の情報」/「外の情報」, 「内の助動詞」/「外の助動詞」と名付けた。それぞれの助動詞には自分自身のことを言及するのに用いられるか否か、命題に対して疑問を持つことができるか否かなどの意味的な特徴、あるいは、終助詞との共起のような統語的な特徴があった。さらにこの意味的な特徴は「なら」と「から」を区別する際にも用いられた。

最初に見た神尾の「情報のなお張り」理論は情報と話し手との心理的な距離を表わすものと言える。情報と話し手との距離が近い場合、例えば、自分自身の予定などは確信を持って断定できるので「直接形」で表わされることになり、逆に、他人から聞いた話のような不確定さを伴う情報は距離が遠く「間接形」で表わされる。一方、ここで提示した「内の情報」/「外の情報」の理論は話し手と情報源との距離であると言えよう。近い場合、すなわち話し手の内からの主観に基づく判断は「内の情報」に属し、他方、伝聞などの外部の根拠に基づく「外の情報」は話し手との距離が遠いと言えよう。これらの理論はおたがい排除するものではなく、情報と話し手との距離を別の観点からとらえたものと言えよう。

この論文はふじみ同人会の研究例会(1989年7月)で発表したものに手を加えたものである。その場で貴重な助言をいただいた原口庄輔、渡辺宥泰の両氏、その他の会員諸氏に、および Uyeno (1971) を貸していただいた上野田鶴子氏に感謝の意を表わしたい。Charles M. DeWolf 氏には英語の要約でお世話になった。

参 考 文 献

- 上野田鶴子 (1972) 「終助詞とその周辺」, 『日本語教育』 17号: 62-77.
 柏岡珠子 (1980) 「ヨウダとラシイに関する一考察」, 『日本語教育』 41号: 169-178.
 神尾昭雄 (1985) 「談話における視点」, 『日本語学』 Vol. 4, No. 12: 10-21.
 生田日弥寿 (1979) 「推量を表す言い方」, 『国際学友会日本語学校紀要』 4号: 1-5.
 松村明編 (1971) 『日本文法大辞典』 明治書院.
 村山康雄 (1991 予定) 「助動詞「だろう」と終助詞との共起」, 『シルフェ』 30号.
 森田良行 (1977) 『基礎日本語 1』 角川書店.
 ——— (1980) 『基礎日本語 2』 角川書店.

- Akatsuka, Noriko. 1985. Conditions and the epistemic scale. *Language* 61-3: 625-39.
- Alfonso, Anthony. 1966. *Japanese language patterns*. Tokyo: Sophia University.
- Jorden, Eleanor H. 1987. *Japanese: The spoken language*. Part 1. Tokyo: Kodansha International.
- . 1988. *Japanese: The spoken language*. Part 2. Tokyo: Kodansha International.
- Kamio, Akio. 1979. On the notion speaker's territory of information: A functional analysis of certain sentence-final forms in Japanese. In *Explorations in linguistics: Papers in honor of Kazuko Inoue*, ed. G. Bedell et al., 213-31. Tokyo: Kenkyusha.
- Kuno, Susumu. 1973. *The structure of the Japanese language*. Cambridge: MIT Press.
- McGloin, Naomi H. 1989. *A students' guide to Japanese grammar*. Tokyo: Taishūkan Shoten.
- Martin, Samuel E. 1975. *A reference grammar of Japanese*. New Haven: Yale University Press.
- Uyeno, Tazuko Y. 1971. A study of Japanese modality—A performative analysis of sentence particles. Ph.D. diss. University of Michigan.